

心的状態の持続を表す「テイル」形に 相当する中国語表現の考察 — 「テイル」形の語用論的機能の観点から —

齋 藤 萌

1. はじめに

日本語の「テイル」形は、「子供がごはんを食べている。」(孩子(正)在吃饭。)や「庭に花が咲いている。」(院子里花开着呢。)のように、「動作の進行」や「状態の持続」を表す典型的な形式である。このような構文は中国語では“在+動詞”や“動詞+着”が用いられ、その対応関係について盛んに研究が進められてきた。しかし、典型的な形式以外の心的状態を表す「テイル」形式の中国語への対応について、詳らかに分析している先行研究は管見の限り多くない。『日本語動詞基本用法辞典』に収録されている日本語のテイル形構文からそれにふさわしい中国語表現を探るという視点から分析を行った結果、心的状態の持続を表す「テイル」形34例のうち、28例が中国語では“動詞のゼロ形式”に、3例は“動詞+了”、2例は形容詞に訳され、“(正)在+動詞”が使用される用例は1例のみであることが観察できた。次の例文を見られたい。

- (1) しかも友は自分に前からその恋を打ちあげ、自分にたより、信じて安心し切っている、そしてむしろ感謝している。(『友情』)

而且，朋友在我面前和盘托出了他的爱恋，完全相信我，依赖我，甚至还感激我。(《友情》)

- (2) 本当はえらいかどうか分かりませんが、僕は、これをやるために生まれて来たと思っているんです。(『あした来る人』)

了起了不起我不知道，不过我想，我就是为干这个才来到这世上的。(《情系明天》)

本稿では、「テイル」形の意味解釈や日中の心的状態を表す動詞の意味特性を確認し、心的状態を表すテイル構文の中国語への対応と“在”、“着”、“動詞のゼロ形式”のそれぞれの語用論的機能について明らかにしていきたい。そして、「ル」形と「テイル」形の形態的対立が中国語で明示的に表れないことや、「テイル」形が中国語では形容詞に対応する用例についても考察を行う。

なお、本文中の用例と対訳については、『日本語基本動詞用法辞典』で挙げられた例文を参考に、可能な限り『中日対訳コーパス』（北京日本学研究中心、2003）から抽出したものをを用いることとする。

2. 先行研究及び考察対象

テイル形構文と中国語の対応から、心的状態を描写する「テイル」形が中国語の動詞ゼロ形式、もしくは形容詞に訳されることを観察した先行研究には菅谷（1996）、下地（2010）が挙げられる。菅谷（1996）は黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』（講談社、1984）とその中国語訳、陳喜儒・徐前訳《窗边的阿彻》（少年儿童出版社、1983）を資料に用いて、日本語の「テイル」形のアスペクティブな意味が実際に中国語でどのように翻訳されているのかを考察し、その分布データを表1にまとめている。

表1：『窓側トットちゃん』のデータ分析

中国語の形態	在V	V着	V了	VC了	VC	V	A	Φ
パーセント (%)	4.94	16.34	4.56	6.84	11.03	27.34	7.22	21.67

出典：菅谷（1996）P171〈表3'〉による図表を引用（Φ：原文に対応していないもの）

菅谷（1996）は動詞ゼロ形式で訳されている「知っている／わかっている」に対応する“知道”などは動作動詞ではなく非動作動詞が多いとして、その考察の対象から除外している。しかしながら、最も標本数の多い動詞ゼロ形式と「テイル」形の対応関係を観察することは、テイル形構文の意味機能や心的状態を表す動詞の表現機能を理解するうえで重要な議論であると考えられる。

『日本語動詞基本用法辞典』において「テイル」形の意味は、(a)動きの最中、(b)心的状態の持続、(c)結果の残存、(d)経験・完了、(e)単純状態の5つに区分さ

れており、本稿ではこの内の心的状態の持続を表す「テイル」形のみを取り出して考察を行う。心的状態の持続を表す「テイル」形とは、感情・思考など心理作用を表す心理動詞から、言語行動や外見的な表情・態度・動作の表現活動を伴うものを除外したものである。例えば、「悼む」は一般的な心理動詞であるが、「みんなで彼の死を悼んでいる。」は、みんなで彼の葬儀に参列しているという拡張的な意味解釈が可能である。このように内面の心理状況にとどまらず、具体的な行為が表出している「テイル」形は、『日本語動詞基本用法辞典』でも動きの最中に区分されるものであり、考察対象からは除外した。

3. 「テイル」形の意味解釈と日本語における心的状態を表す動詞の意味特性

本節でまず、日本語の「テイル」形の基本的な意味について確認する。以下の例文を見られたい。

(3)a. 太郎が走っている。 b. 時計が止まっている。 c. 山がそびえている¹⁾。

(3)a. は〈動きの最中〉を表す「テイル」であり、発話時現在において「走る」という行為が進行していることを表す。「走っている」は「走る」という動きの始点と終結点の間に存在する。一方、(3)b. の「テイル」は〈結果の残存〉を示し、「時計」が発話時以前に止まり、今もなおその状態が持続していることを表す。「止まっている」は、「時計が止まる」という状況の始点と終結点の間ではなく、「止まる」という事態の起こった後の時点にあることが示される。最後の(3)c. は、文の主動詞として現れるとき常に「テイル」形と共起するタイプのもので、〈単純状態〉を表し、動きの契機を持たずに、単に発話時現在の状態を述べるものである。時間の幅では動きの始点と終結点はともに見えない。本稿で取り上げる心的状態の持続を表す「テイル」形は、このうちの〈動きの最中〉から〈単純状態〉へ移り動く傾向にあるものである。心的状態動詞の表す意味は、物理的な動作とは異なり、心的な動作であるゆえ、動きの始点や終結点が定かでなく、動きそのものが顕在的・外在的でない。顕在的・外在的でないことは、動きが希薄であると把握されることにつながり、動きが希薄である分、このタイプは、典型的な〈動きの最中〉ではなく、単なる持続状態

を表す〈単純状態〉に近づくと考えられている²⁾。

金田一(1950)が「テイル」形の意味上の違いを、共起する動詞のタイプによってもたされるものとして捉えて以降、動詞の意味的タイプをもとに、「テイル」形の意味分析を行う研究が盛んになされてきた³⁾。しかしながら、動詞をその意味によって分類する場合の、分析上の厳密な基準が示されておらず、二つ以上の項目にまたがるものも多い。本節では、Smith(1992)が用いた〔静態性(static)〕、〔継続性(durative)〕、〔完結性(telic)〕という理論的枠組みをもとに、アスペクトからの解放という点も考慮しながら、心的状態を表す動詞の意味特性を再検討する。

Smith(1992)は基本的アスペクトを、状況タイプ⁴⁾の素性(features)に基づいて、5つの種類に分類した。鎌田(1996)は、日本語にもそのような状況アスペクトが存在することを確認し、さらに日本語独特の「非過程」という状況があることを導き出した。表2は、鎌田(1996)であげられていたものに修正を加えて表の形にしたものである。

鎌田(1996)では、状態タイプのアスペクト特性を持つ動詞は、「ある」や「いる」などの動きを表さない、静的な状態動詞であり、このような動詞には〔完結性〕特性が関与しないと考えられている。状態動詞以外の動詞は全て動きを表す、動的な動詞である。活動タイプの特性を持つ動詞は、「笑う」や「歩く」などの、動きに一定の持続時間つまり〔+継続性〕があり、自然な終結点を持たず、動作主がその行為をやめようと思う時点まで持続する(〔-完結性〕)ものである。このタイプの動詞の「テイル」形は、動きの始点と終結点の間に存在する。完成タイプの特性を持つ動詞は、「太る」や「生える」などのように、一定の持続時間〔+継続性〕が必要であり、かつ何らかの終結点〔+完結性〕を持つ。「太っている」、「疲れている」のように、「テイル」形は「太る」や「疲れる」という事態の起こった後の時点にある。一過性タイプの動詞は、「叩く」や「打つ」のようにそれ自体は単一の動き(〔-継続性〕)を表し(「叩いている」は単一の動きを繰り返し行うことによって実現される)、動作主が行為をやめようと思うまで繰り返すことができる(〔-完結性〕)のものである。

表 2：状況タイプのアスペクト

状況 (situations)	静態性 (static)	継続性 (durative)	完結性 (telic)	日本語動詞
状態 (states)	+	+	—	ある、いる、できる
活動 (activity)	—	+	—	読む、書く、笑う
完成 (accomplishment)	—	+	+	太る、生える、疲れる
一過性 (semelfactive)	—	—	—	叩く、打つ
達成 (achievement)	—	—	+	始まる、終わる、死ぬ 知る、堂々とする ⁵⁾
非過程 (non-processive)	+	—	+	優れる、そびえる

出典：鎌田 (1996) (40) P34-35より引用

その「テイル」形は、「叩いている」のように動作の最中、つまり始点と終結点の間に存在している。達成タイプの動詞は、「始まる」や「終わる」などのように、ある状態から別の状態へ一瞬のうちに変わり（[-継続性]）、必ず何らかの帰結をもたらす（[+完結性]）ものである。「始まっている」や「死んでいる」のように、「テイル」形は「始まる」や「死ぬ」という事態の起こった後の時点にある。そして、鎌田 (1996) は「優れる」や「そびえる」などの、継続的な特徴を表すのに「テイル」を伴って初めて可能になるものは非過程動詞に分類した。非過程動詞には[継続性]特性が関与しないため、継続性の意味を表すために「テイル」形が必須の要素となることが言及されている。

鎌田 (1996) は、「知る」などの動詞は、達成タイプの動詞と同じく [-継続性：+完結性] 素性を持ちながらも、達成動詞のように「テイル」形と共起しても結果の状態を表さないことから、達成動詞と非過程動詞の両方にまたがるものであると分析した。例えば、「始まる」の「テイル」形、「その会議は3時間前に始まっている。」は結果の状態を表すが、「知る」の「テイル」形は「3年前から彼を知っている。」のように状態の持続を表すという。

以上、鎌田 (1996) の分類に基づいて、それぞれの「テイル」形が表す動詞の状況について確認を行った。完成動詞、達成動詞、非過程動詞の [+完結性]

をもつ動詞の「テイル」形は動きの始点と終結点の間ではなく、動きの起こった後の時点にあることがわかる。では、本稿で取り上げる心的状態を表す動詞はどのような素性をもつのだろうか。以下の例文を見られたい。

(3)b. 時計が止まっている。 d. 私は彼を愛している。

(3)b. では「止まっている」は、「時計が止まる」という状況の始点と終結点の間ではなく、「止まった」後の時点にあり、これと同様に、(3)d. の心的状態の持続を表す「テイル」形も、発話時以前に愛し、今もなおその状態が持続していることを表す。やはり「愛する」という状況の始点と終結点の間ではなく、事態の起こった後の時点にあることが示されている。このことから心的状態を表す動詞は〔+完結性〕の素性をもつと考える。

次に、心的状態を表す動詞の〔継続性〕について検討していきたい。

Smith (1992) によると、文には2つのタイプのアスペクト情報があり、動詞の分類で用いられた状況アスペクトのほかに、視点タイプのアスペクトがあるという。視点には完了 (perfective) と未完了 (imperfective) の2種類がある。視点アスペクトとは、時間が経過していく中で、出来事が始まり終結するまでの時間の幅 (temporal interval) 全体、あるいは一部分にだけ焦点が当たっているかどうかを示すものである。〈完了〉と〈未完了〉の違いは含意 (entailment) をもとに説明することができる。

(4)a. 太郎は学校まで走った。 b. 太郎は学校に向かって走っていた。

(鎌田 1996 : P16(2)を加筆修正して引用)

(4)a. は〈完了〉の視点アスペクトを表す文であり、(4)b. は〈未完了〉の視点アスペクトを表す文である。鎌田 (1996) は、(4)a. が真であるとすれば(4)b. も真であるが、この逆の含意は成立しないと考えた。「太郎が学校に向かって走っていた」からと言って必ずしも「学校まで走った」ことにはならない。疲れて途中から歩いたかもしれないし、途中で学校に行くことをやめてしまったかもしれないという。

状況タイプの分類に基づいて、それぞれの「テイル」形が〈完了〉・〈未完了〉のどちらの視点アスペクトを表すのかについて見ていく。

活動動詞 : 太郎は本を読んでいる。(未完了)

太郎は本を読んだ。(完了)

完成動詞 : 太郎は太っている。(未完了)

太郎は太った。(完了)

一過性動詞 : 太郎は机を叩いている。／太郎は机を叩いた。

達成動詞 : 太郎は死んでいる。／太郎は死んだ。

活動動詞や完成動詞のように動きに一定の持続時間つまり [+継続性] がある動詞については、(完了)・(未完了) の視点アスペクトの対立は明らかである。「太郎が本を読んでいる」からと言って「太郎は本を読んだ」ことにはならない。これに対し、一過性動詞・達成動詞のように短時間のうちに動作が終結する [-継続性] をもつ動詞は、視点アスペクトの対立が不明確であることが観察される。これは、動作の始点から終結点までの時間幅が短いために、一部分にだけ焦点を当てることを難しくなったのではないかと推測する。では、心的状態を表す動詞の「テイル」形はどうだろうか。

心的状態を表す動詞 : 太郎は花子を信じている。／太郎は花子を信じた。

太郎を花子のことを考えている。／太郎は花子のことを考えた。

一過性動詞・達成動詞の [-継続性] をもつ動詞と同様に、視点アスペクトの対立が不明確であることがわかる。「信じる」や「考える」は、心的な動作であるため、動きの始点や終結点が定かでない。始点と終結点を求めることができないゆえに、[-継続性] の素性をもつのではないかと考える。鎌田 (1996) でも非過程動詞は [継続性] 特性には関与しないことを指摘されているが、心的状態を表す動詞は非過程動詞とは異なり、「テイル」形を伴わずとも文を構成することができる。本稿では、動作の始点と終結点を求めることができないために [-継続性] をもち、ある状態から別の状態への変化を表し何らかの終結点 ([+完結性]) をもつことから、心的状態を表す動詞を [+静態性 : -継続性 : +完結性] 素性をもつタイプとして、新たにカテゴライズした。以下は表 2 に修正を加えたものである。

以上、「テイル」形の意味解釈と日本語における心的状態を表す動詞の意味

表2' : 状況タイプのアスペクト

状況 (situations)	静態性 (static)	継続性 (durative)	完結性 (telic)	日本語動詞
状態 (states)	+	+	—	ある、いる、できる
活動 (activity)	—	+	—	読む、書く、笑う
完成 (accomplishment)	—	+	+	太る、生える、疲れる
一過性 (semelfactive)	—	—	—	叩く、打つ
達成 (achievement)	—	—	+	始まる、終わる、死ぬ
非過程 (non-processive)	+	—	+	優れる、そびえる
心的状態 (state of mind)	+	—	+	知る、愛する、思う

特性について確認した。日本語における心的状態を表す動詞が「-継続性」かつ「+完結性」特性を持つ動詞であることがわかった。

4. 心的状態の持続を表す「テイル」形と中国語の対応関係

冒頭で述べたように、発話時現在の心情を描写するテイル形構文のほとんどは中国語では動詞のゼロ形式を用いて表現されることが観察された。

(5)上原さんのお仕事を尊敬しているから、と簡単に言い切ってしまうも、ウソで、僕にも本当は、はっきりわかっていないんです。(『斜陽』)
简单地说是因为尊敬上原先生的工作。不过那也是胡扯，实际上我自己也闹不清是什么原因。(《斜阳》)

4.1 「テイル」形の意味機能と中国語の心的状態を表す動詞の特性

テイル構文は現在における事実を、継続的に捉えるアスペクト表現であると同時に、前提として、事象が発話時点において真であることを表す⁶⁾ という機能をもつ。(5)を例にとると、「尊敬する」という動作は「テイル」形を用いることにより、外的時間経過と関連付けられ、発話時点において動作の局面が成立し、なおかつその状態が一定時間継続的に持続しているということを表すものである。

一方、中国語では心的状態を描写する場合、“了”、“正在”などの外的時間経過と関連付けるための時間的成分を伴わずに文を構成し、発話時点における

現実状況を表すことができる。郭銳（1997）は“我认识他。”（私は彼を知っている。）を例に挙げ、中国語の“知道”や“认识”の心的状態を表す動詞は、指し示す状況がひとたび成立すれば、時間軸のどの点を見ても常にその状況下にあるため、時間の経過と無関係に現実状況を表せることを指摘した。これは中国語のみに見られる現象ではなく、心的状態を表す動詞自身の内在的時間素性の無限性と均質性⁷⁾が関係しているためだと広く考えられている。

中国語の心的状態を表す動詞と時間展開との関わりが希薄な点は、“不”・“没”の否定詞を伴う否定表現によってテストすることもできる。一般に、“没”は時間に関わる否定であり、“不”はニュートラルな状態の否定として認められているが、本稿で扱う心的状態の持続を表す「テイル」形はいずれも“不”で否定されるものであった。

(6) 中国語訳 简单地说是因为 {不尊敬/*没尊敬} 上原先生的工作。
不过那也是胡扯, 实际上我自己也闹不清是什么原因。

日本語では、時間経過と関連付けるために、さらに心的状態が一定時間持続することを表すために「テイル」形が使用されるが、中国語の心的状態を表す動詞は、時間の経過と無関係にゼロ形式のままでもこの文脈を担うことができる。日本語では心理活動を動作動詞と同様に時間によって変化する動きとしてとらえる特性をもつが、時間展開と関係性をもたない中国語の場合、心的状態をより状态的に捉えていると考えられる。

4.2 「テイル」形と対応関係にあるとされる“在”・“着”との共起

次に、なぜ一般に「テイル」形と対応関係にあるとされる、動作の進行・持続を表す“在”・“着”と共起しにくいかについて考えていきたい。

心的状態を表す動詞は、日本語においても中国語においても、その動きが顕在的・外在的でないゆえ、動作の開始や終結が定かではない（国立国語研究所：1985）。進行形は出来事が時間の中の一瞬として概念化されるだけでなく、個別化された、境界線のある状況として概念化されることを要求するので、本質的に時間的局面的境界線をもたない心理状態を表す動詞は、進行中の意味とし

での“在”は共起しにくい。また、呂叔湘・朱德熙(2003)によれば、“愛”、“恨”、“害怕”、“拥护”などの動詞は、それ自身が[+継続性]をもつため、動作が一定時間持続することを表す場合も、“着”の使用は必要ではないとされている。これに対し、日本語の「愛する」などの心的状態を表す動詞は、第3章で述べてきたように[-継続性]素性をもつものである。

しかしながら、現代中国語において、心理状態を表す動詞と“在”・“着”との共起は必ずしも不適格になるとは限らない。

(7) 她的的确确一直在爱着你。 王朔《空中小姐》

彼女は本当にあなたのこと、ずっと愛してたのよ。

(讚井：2000より引用)

讚井(2000)は(7)を例に挙げ、「今なお持続中」であることを特に強調したい場合のみ、このような表現が可能になることに言及した⁸⁾。

以下に、日本語の「テイル」形に本質的に備わっていると考えられる、〈報告性〉、〈現象描写性〉、〈客観性〉という3つの性質(谷口：1997)を考慮しながら、本来なら必要のない“在”・“着”の使用状況と“在”・“着”と共起される場合のそれぞれの語用論的機能について観察していく。

4.2.1 “在+心的状態を表す動詞”の語用論的機能と報告性

讚井(2000)によれば、明清代の古白話では前置詞句“在那里”による「進行表現」が一般的であった。その後“在那里”が虚化あるいは文法化されて、五四期以降、動詞の前に“在”のみが現れるようになったという。“在+動詞(句)”が多くの場合「進行中」の意味をもつことは確かであるが、伊原(1982)は、“在那里”形の表現は動詞の前の連用修飾語の位置に置かれるためにもともと動詞を強調する働きをもっており、その動詞強調機能によって「進行」が示されるのだと考えた。郭曉麟(2015)においても、“在”は話し手の認定・判断・推測にかかわる表現で、現実状況の真实性に対して強調のムードを示す働きをなすことが指摘されている。

(8) 他脸上笑咪咪的, 心里却在生气。(郭: 2015より引用)

彼の顔はにこにこしていたが、心の中では怒っていた。

郭曉麟 (2015) は例(8)を取り上げて、顕在的事実として彼は「笑っている」が、顕著な外見的兆候を表さない内在的な「怒っている」という現象を表明するために、“在”が使用されているのだと分析を行っている。これは呂淑湘 (1942) でも指摘された“在”の“对于事实的申明”(事実に対する表明) という機能である。言い換えれば、通常のコンテキストからは聞き手が意識できない事実や知り得ない内情について話し手が告知を行っているのであり、この“在+動詞(句)”の形で新しい情報を提供していると考えられる。

日本語の「テイル」形にもこのような〈報告性〉の語用論的機能があることが認められている。

(9)a. よく降るなあ。

b. よく降っているなあ。 (谷口: 1997より引用)

降り続く雨を窓越しに眺めながら独り言をつぶやくといった場面では a. と b. の両方が発話可能である。しかし、「そっちの天気はどう?」と誰かに天気の様子を尋ねられてそれに答える(報告する)場合には、bの「テイル」形がふさわしいと考えられている。

(10) 「そっちの天気はどう?」

a. *よく降るよ。

b. よく降っているよ。 (谷口: 1997より引用)

このように、同じ出来事であっても、それを相手に伝える(報告する)場合には、テイル構文の方が適切である。“在”の話し手による動作・状態の存在の〈前景化〉させるという機能は、「テイル」形の〈報告性〉に対応するものであると考えた。

4. 2. 2 “心的状態を表す動詞+着”の語用論的機能と現象描写性

『中日対訳コーパス』を調査した結果、以下のような“心的状態を表す動詞+着”の用例が見受けられた。

- (11) 她热烈的爱着“家”，以为一个美好的家庭，乃是一切幸福和力量的根源。（《关于女人》）

美しい家庭はすべての幸福と力の根源だと考えた。深く「家」を愛していた。（『女の人について』）

- (12) 他想着，不知不觉地来到高家门口，院子里的欢笑声把他吓了一跳。（《金光大道》）

そう思いながら、いつの間にか高家の門口までやってきていた。かれは、庭先の明るい笑い声にあっけにとられた。（『輝ける道』）

- (13) 老头子有点纯为唬吓祥子而唬吓了，他心中恨祥子并不像恨女儿那么厉害，就是生着气还觉得祥子的确是个老实人。（《骆驼祥子》）

親方としては、ほんとおどかしのつもりで言ったのであった。怒っているといえばむしろ娘にたいしてであった。だから、どなりながらも、祥子はなんといってもまじめなやつだと思っていた。（『駱駝祥子』）

中国語における心的状態を表す動詞は、それ自身が〔+継続性〕を伴うため、動作が一定時間持続することを表す場合にも、通常“着”の使用は必要ではないとされる。調査の結果、心的状態を表す動詞が“着”と共起する用例は、例(11)~(13)のようにほとんどが複文や重文で構成されるものであることがわかった。上記例文では、話者の主張したい事柄は、“動詞（句）+着”で導かれる節にはなく、その後続く“以为一个美好的家庭，乃是一切幸福和力量的根源”や“院子里的欢笑声把他吓了一跳”、“还觉得祥子的确是个老实人”にある。こうした“着”の働きは（背景化作用）と呼ばれ、方梅（2000）や三宅（2005）でも指摘されてきた。つまり、“動詞（句）+着”形は、主張したい事柄の背景（background）となる事実を記しているのである。この種の用例は日本語では、ほとんどが「～ながら」や複数の文で訳されていた。また、讀井（2000）は“在等”と“等着”の対比を用いて、目的語に焦点をあてて尋ねる表現では、“在+動詞（句）”がふさわしく、“動詞（句）+着”は語用論的に不適格になることに言及した。

- (14) 你 {在等 / #等着} 一个华侨，对吧？

(#は文が語用論的に不適格であることを表す。)

このように、“動詞(句)+着”は行為それ自体を正面に据えて相手に伝えるものではなく、後続文を予期させる表現である。例文(ii)の“着”は省略することもできる。

(ii)她热烈地爱“家”，以为一个美好的家庭，乃是一切幸福和力量的根源。

例(ii)'は例(ii)と比較して、具体的な出来事というよりも、「彼女は家を愛する人間である」というように、ものの性質や属性を表しているように感じられる。“動詞のゼロ形式”と“動詞(句)+着”に存在するこのような差異は、日本語においても「ル」形と「テイル」形の対立で現れる。これが、「テイル」形のもつ二つ目の性質、〈現象描写性〉である。谷口(1997)では以下の用例が挙げられている。

(i5)私はバツハよりブラームスに {ひかれる／ひかれている}。

「ひかれる」からは「私はそのような人間である」という印象を受けるが、「ひかれている」はそれをひとつの現象として捉えている。「ル」形に比べて、出来事をより具体的に、特定の場面の中の現象として描こうとする「テイル」形の性質は、中国語では“動詞(句)+着”が担うものであると推測する。

本節では、心的状態の持続を表す「テイル」形と“在”・“着”との共起について考察を行い、“在”のもつ〈前景化〉作用や“着”の〈背景化〉作用について観察した。

4.3 “心的状態を表す動詞ゼロ形式”の語用論的機能と客観性

繰り返し述べてきたように、発話時現在の心情を描写するテイル形構文は、特殊なコンテクストがない限り、中国語では通常“動詞のゼロ形式”を用いて表現される。これは4.1や4.2で見てきたように、中国語の心的状態を表す動詞が、時間の経過と無関係にゼロ形式のまま文脈を担うことができるため、また動詞自身が[+継続性]をもつためだと考えた。

中国語の“動詞ゼロ形式”に対応すると思われる、日本語動詞の「ル」形は、ものの本質や心理、習慣を表す場合を除いて、通常、未来の出来事を表すとき

に用いられるが、心的状態を表す場合に関して言えば、「そう思います/思っています。」(我这么认为。)のように、一部の動詞について未来を表す「ル」形の現在への使用範囲の拡大が観察される。例えば、

- (16) 和尚さんもね、あの病気さえ無ければ、実に気分の優しい、好い人物なんです——申分の無い人物なんです——いえ、私は今だっても和尚さんを信じているんですよ。(『破戒』)

如果他不是犯了疯病的话，倒确实是个和蔼可亲的好人，没有什么可说的。不，就是现在，我还是相信他。(《破戒》)

- (17) 「ああ信じるよ、もうこれからきっと信じるよ。」(『痴人の愛』)
“相信，今后我一定相信。”(《痴人之爱》)

このように心的状態を表す場合に、「ル」形の本来もつ未来時制の意味が失われ、「テイル」形との対立が中和される現象について、横田(1997)は、「思う」・「考える」のような心的状態を表す動詞が、文末において「ル」形で使われる場合、常に現在の判断・主観を表すと述べた。これに対し、「テイル」形は、話し手が現時点よりも少し前にそう思い始め、現在までそう思い続けていることが示されるとしている。例(16)の「信じている」では現在を遡るある一定の時間の幅が意識されており、例(17)の一つ目の「信じる」は単に発話時現在の話し手の思考内容を述べるものである。対訳からわかるように、中国語は日本語のような「ル」形・「テイル」形の使い分けを有さない。

また、日本語の「ル」形と「テイル」形は動作のもつ時間幅以外にも、語用論的機能において次のような違いを有する。例(18)を参照されたい。

- (18)a. {私は／*彼は} そう思う。
b. {私は／彼は} そう思っている。

(谷口：1997より引用)

横田(1997)のいう「思う」・「考える」などの動詞が「ル」形で使用されると、常に現在の判断・主観を表すというのは、(18)a. にみられる人称制限に関する事実を根拠にしたものである。日本語では(18)a. のように話し手以外を主語に立てたい場合は、(18)b. のように「テイル」形にしなければならず、これは「テ

イル」形に主観的な動詞を客観的に表すという機能を認めるものである。例文(18)は中国語では“我这么认为”“他这么认为”のように表現することができ、いずれも非文には当たらない。

さらに、「テイル」形は以下に見られるように「絶対(に)」のような主観的・断定的な副詞とも共起することはできない。

(19)おれ、絶対 {そう思う / *思っている} よ。(谷口: 1997より引用)

日本語学で従来から指摘されてきた「テイル」形の客観性という第三の機能は、4.2で見てきた“在”・“着”の使用では表すことができない、“心的状態を表す動詞ゼロ形式”のみが有する語用論的機能であると考えた。

4.4 “心的状態を表す動詞”以外の動詞の場合

日本語の「テイル」形に本質的に備わっていると考えられる〈報告性〉、〈現象描写性〉、〈客観性〉の3つの機能を考慮しながら、〈報告性〉という機能は“在”の〈前景化〉作用が、〈現象描写性〉の機能は“着”の〈背景化〉作用が、〈客観性〉という機能は“動詞のゼロ形式”がそれぞれ担うことを述べてきた。本節ではこうした機能が心的状態を表す動詞以外においても観察されるか否かについて検討していきたい。

[存在する]

(20) 前面提到, 序列规范在任何国家里都存在。(《纵式社会的人际关系》)

先にもふれたように、序列という規準は、いかなる社会にも存在している。(『タテ社会の人間関係』)

(21) 这或许和日本人的本意相差万里, 但是只要这种社会理念、思考方式, 或“连续”思考方式切实存在着, 就难以保证绝对不犯同样的错误。(《适应的条件》)

その意図はまったく異なるとしても、それが明らかに存在している限り、同じパターンのあやまちを犯さないとはいいきれないのである。

(『適応の条件』)

例(20)は時間的展開を含まない常識、通例を述べた文であり、中国語において

は〈客観性〉の機能をもつ“動詞のゼロ形式”が使用されている。例(21)では、話者の主張したい事柄は、“存在着”で導かれる従属節にはなく、その後にくく“就难以保证绝对不犯同样的错误”にあると考えられる。ここでも、“着”のもつ〈背景化〉作用について確認できた。

[見ている]

- (22) 一股臭气, 像我身上的汗臭味儿, 越来越浓了。有人在看我。(《野火》)
臭気が、私自身の汗の臭いに似た臭気が、近づきつつあった。誰かが
見ている。(『野火』)

これは話し手が臭いから「誰か」の気配を感じとり、その結果「誰かが見ている」という新しい情報を“在+動詞”の形で告知を行っている文である。4.2で述べてきた“在”の動作・状態の存在を〈前景化〉させるという機能であると考えた。

- (23) 我嫌麻烦, 抡起钓丝摔到船里, 鱼立即死了。红衬衫和小丑吃惊地望着。
我把手抄进海水哗啦哗啦洗了一阵, 用鼻子一闻, 仍有一股鱼腥味。
(《哥儿》)

面倒だから糸を振って胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んでしまった。
赤シャツと野田は驚いて見ている。おれは海の中で手をざぶざぶと
洗って、鼻の先へあてがってみた。まだ腥臭い。(『坊っちゃん』)

三宅(2005)においても、“動詞+着”が小説などのストーリーが展開する前段階の背景描写によく用いられることが指摘されているが、例(22)はこの〈背景化〉作用を示すものと推測する。

以上、“在”の〈前景化〉という機能、“着”の〈背景化〉の機能、“動詞のゼロ形式”のもつ〈客観性〉の機能が心的状態を表す動詞以外でも認められると考えた。

5. 「テイル」形が中国語の形容詞に相当する場合

次に「テイル」形が中国語の動詞ではなく、形容詞⁹⁾に相当する用例について見ていきたい。

心的状態の持続を表す「テイル」形に相当する中国語表現の考察

- (24) 伯父も伯母も母も、みんな喜んでいる。(『青春の蹉跎』)
伯父、伯母、母亲都十分高兴。(《青春的蹉跎》)
- (25) しかし顔つきは余りに真剣なので、怒っているのか、驚いているのか、悲しんでいるのか、それが現われず、なにか仮面じみて、ひどく単純に見えた。(『雪国』)

但是，由于那副表情过分认真，不知是怒是惊，还是悲伤！像面具一样，显得非常单纯。(《雪国》)

影山（2009）によれば形容詞は〈状態〉に特化した品詞であり、一方、動詞は〈動き〉を表すものと〈状態〉を表すものとされる（金田一：1950）。動詞が表す事態は、時間の流れの中で開始したり終了したりする時間展開を含んでいる。これに対し、「本棚に国語辞典がある」の「ある」のように存在を表す状態動詞や、「空が青い」などの形容詞は、状態が継続する限り、展開したり、変動したりしない様な事態を表すものである。このように時間によって展開するか、変動しない様な事態であるかという時間感覚の違いは「動的性（dynamicity）」の有無による対立として捉えられる。

表3に見られるように、日本語には「喜ぶ」、「悲しむ」に対応する心理形容詞「うれしい」、「悲しい」があるように、心的状態を表す動詞に対応する心理形容詞が数多く存在する。

表3：心的状態を表す形容詞と動詞の日中対照

日本語A	うれしい	悲しい	痛い	悩ましい
日本語V	喜ぶ	悲しむ	痛む	悩む
中国語A/V	高兴	伤心, 悲伤	疼	为难

心的状態を表す形容詞は「-動的性」をもつものであり、心的状態を表す動詞は「+動的性」をもつものである。日本語では、(26)のように形容詞と動詞の使い分けが可能である。

(26)私はうれしい。／私は喜んでいる。

我很高兴。

人称制限はあるものの¹⁰⁾、日本語では心的状態を表す形容詞と動詞の交代が

可能であり、事態を時間の流れの中で変動しない一様な静的な〈状態〉として捉えるか、時間によって展開する〈動き〉として捉えるかで品詞の選択が比較的自由に行われる。このような違いは、心的状態を〈状態〉として捉えるか、〈動き〉として捉えるかという事態の捉え方を反映するものである。つまり、日本語には時間展開を含まない〈状態〉と、動きを表しつつ継続局面を切り取る〈動き〉の対立が存在する。

一方、中国語の心的状態を表す動詞にはそのような相違は観察されにくい。4.1で述べた通り、中国語の心的状態を表す動詞は“知道”や“认识”のように、指し示す状況がひとたび成立すれば、時間軸のどの点を見ても常にその状況下であり、時間の経過と無関係に現実状況を示すことができる。時間展開との関わりが希薄であるため、心的状態を時間によって展開しない〈状態〉として捉えられているのではないかと推測する。

6. おわりに

以上、心的状態を表す「テイル」形式の中国語への対応と“在+心的状態を表す動詞”、“心的状態を表す動詞+着”、“心的状態を表す動詞のゼロ形式”のそれぞれの語用論的機能について検討してきた。発話時現在の心的状態を描写するテイル形構文はほとんどの場合、中国語では“動詞のゼロ形式”を用いて表される。これは、日本語では時間経過と関連付けるために「テイル」形の使用が不可欠であるのに対し、中国語の心的状態を表す動詞は、時間の経過と無関係にゼロ形式のままこの文脈を担うことができるためだと考えた。さらに、日本語の心的状態を表す動詞は〔-継続性〕素性をもつが、中国語は心的状態を表す動詞は〔+継続性〕であることに言及した。

次に、日本語の「テイル」形に本質的に備わっていると考えられる〈報告性〉、〈現象描写性〉、〈客観性〉という3つの機能を考慮しながら、〈報告性〉の機能は中国語では“在”の〈前景化〉作用が、〈現象描写性〉の機能は“着”の〈背景化〉作用が、〈客観性〉の機能は“動詞のゼロ形式”がそれぞれ担うことを提案し、こうした機能が心的状態を表す動詞以外においても認められることを

観察した。

最後に、「テイル」形が中国語の形容詞に対応する用例から、日本語では心的状態を〈動き〉として捉えるか〈状態〉として捉えるかで品詞の選択が任意であるが、中国語にはそうした可能性が見られにくいことに触れた。

注

- 1) 「そびえる」のように、「ル」形で単独で終止形を取ることがなく、常に「テイル」の形で現れる動詞は、金田一(1950)で「第四種の動詞」に分類されるものである。
- 2) 『日本語基本動詞用法辞典』(大修館書店、2000)を参照した。
- 3) 高橋(1969)、鈴木(1972)、藤井(1976)、奥田(1977)などがある。
- 4) 状況タイプは、動詞あるいはその動詞が義務的にとる目的語や補部などを表すアスペクト形式である。
- 5) 鎌田(1996)は、「堂々としなさい」、「あの人はいつも堂々としている」の例を挙げ、「堂々とする」を動詞に区分している。
- 6) 町田(1989)は「馬は走る。」と「馬は走っている。」を例に挙げ、文の述語が「テイル」形であると、主語である名詞句はある特定の対象を指示することになり、文全体の意味も、「(ある)馬が走る。」などと事象が発話時点において真であることを表すことになると述べている。(『日本語の時制とアスペクト』P159参照)
- 7) 内在的時間素性の無限性と均質性：例えば、動作動詞の「食べる」というプロセスは「花子はアイスクリームを食べている。」は花子が口を開くことから始まり、アイスクリームを口元にもっていき、アイスクリームと接触し、口の中に入れ、溶かして飲みこむというように、動作のどの特定部分を見ても他のどの部分とも同等ではないが、「花子はアイスクリームを愛している。」というプロセスはどの時間的断片も、それ以外の時間的断片と変わらない。
- 8) 讚井(2000)では、例(4)の“在”は話し手が知っている新情報を相手に伝えようとする表現機能をもつものとされている。
- 9) 影山(2009)によれば、形容詞は「状態」に特化した品詞であり、一方、動詞は「動き」を表すものと「状態」を表すものがあると言われている(金田一：

1950)。本発表で取り扱う、心的状態を表す動詞が、「動き」を表すものか、「状態」を表すものかについて、先行研究の見解は一致していない。

- 10) 感覚・感情を表す形容詞においても、述語として用いられるとき、二人称や三人称が主語の場合は自然な表現としては成立しにくいことが指摘されている。例えば、「彼は悲しい。」は不自然な表現である。なお、中国語にはこのような制限は観察されない。

参考文献

- Smith, Carolot S 1992 *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers pp27-64.
- 方梅 2000 〈从“V着”看汉语不完全体的功能特征〉《语法研究和探索(9)》商务印书馆 38-55頁。
- 郭曉麟 2015 〈事实的申明：体标记“在”的语用意义〉《世界汉语教学》第4期, 478-490頁。
- 郭銳 1997 〈过程和非过程—汉语谓词性成分的两种外在时间类型〉《中国语文》第3期
- 影山太郎 2009 『日英対照 形容詞と副詞の意味と構文』大修館書店 3-12頁。
- 鎌田精三郎 1996 「現代日本語の「テイル」形アスペクトの意味解釈」『城西大学研究年報. 人文・社会科学編』20 15-38頁。
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15 PP48-63；金田一春彦（編）1976 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に所収 5-26頁。
- 国立国語研究所 1985 『現代日本語動詞のアスペクトと動詞』秀英出版
- 小泉保ほか編 2000 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 呂叔湘 1942 《中国文法要略》商务印书馆 2014
- 呂淑湘・朱德熙 2003 《语法修辞讲话》商务印书馆
- 町田健 1989 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 三宅登之 2005 「表示动态的“V着”的实际使用情况」『言語情報学研究報告』No.7 127-145頁。
- 伊原大策 1982 「進行を表す「在」について」『中国語学』229頁。

心的状態の持続を表す「テイル」形に相当する中国語表現の考察

- 讀井唯允 2000 「“在等”“等着”“在等着”-“在”と“着”の文法的意味と語用論」『人文学報』No.311 53-73頁。
- 下地早智子 2010 「現代中国語における「シテイル／シテイタ」相当表現一日中のアスペクト対立に見られる視点と主観性-」『神戸大論叢』第61巻第2号 87-108頁。
- 菅谷有子 1996 「「V-テイル」に対応する中国語アスペクト」、『小出記念日本語教育研究会論文集』No.5 163-186頁。
- 谷口秀治 1997 「テイルの3つの性質（客観性、現象描写性、報告性）について：ル形との対比から」『広島大学留学生センター紀要』(7) 40-48頁。
- 山本雅子 2008 「テイルの意味」『言語と認知のメカニズム-山梨正明教授還暦記念論文集- ひつじ書房 439-452頁。
- 横田淳子 1998 「「～と思う」およびその引用節内の動詞の主体について」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』24号